

タガラシ		学名	<i>Ranunculus sceleratus</i>
		分類	キンポウゲ科 キンポウゲ属
分布	北海道から沖縄にかけて分布		
生育地	川岸や水路など		
開花時期	4～5月		
<p>キンポウゲ科キンポウゲ属の越年草。水田や用水路などに生える雑草。有毒植物。</p> <p>和名の由来は、噛むと辛味があることから「田辛子」という説と、収量の少ない田に生えることから「田枯らし」という説がある。</p> <p>日本全土の水田のような水たまりによく生える。</p> <p>プロトアネモニンという毒をもち、誤食すると消化器官がただれたり、触ると皮膚がかぶれたりする。</p>			
			

トクサ		学名	<i>Equisetum hyemale</i>
		分類	トクサ科 トクサ属
分布	本州中部から北海道にかけて		
生育地	湿地		
開花時期	7～8月		
<p>その姿のおもしろさから、庭で栽培されることもある。</p> <p>茎は煮て乾燥させたものを紙ヤスリのようにして研磨の用途に使う。紙ヤスリが一般的な現代でも高級なつげぐしの歯や漆器の木地加工、木製品の作業工程などの磨き仕上げる工程に使用されている。</p> <p>クラリネットなどのリード楽器の竹製リードを磨いて調整するのにトクサが用いられる。トクサはアイヌ語で「シブシブ」と呼ばれるが、これも物を磨く際のオノマトペに由来する名である。</p>			
			

<h1>温帯性スイレン</h1>		学名	<i>Nymphaea</i>
		分類	スイレン科 スイレン属
分布	園芸用改良品種		
生育地	湿地		
開花時期	5～10月		
<p>日本にはヒツジグサ（未草）の1種類のみ自生する。日本全国の池や沼に広く分布している。白い花を午後、未の刻ごろに咲かせる事からその名が付いたと言われる。</p> <p>睡蓮はヒツジグサの漢名であるが、一般にスイレン属の水生植物の総称として用いられる。</p> <p>日本において一般的なスイレンは、いくつかの野生種を交配、品種改良し、作出された園芸種である。花の色、葉の色、模様、などについて様々な姿の品種が存在する。</p>			
			

<h1>スジシマドジョウ</h1>		学名	<i>Cobitis sp.</i>
		分類	コイ目 ドジョウ科
分布	日本全国		
生息域	平野部の水田や湿地など		
<p>雑食性で、ユスリカの幼虫などを主に摂食する。ひげには味蕾（みらい）という器官があり、食物を探すのに使われる。えらで呼吸するほか、水中の酸素が不足すると、水面まで上がってきて空気を吸い、腸で空気呼吸も行う。</p> <p>体の斑紋は地域的な変異、あるいは個体差が大きく、種内変異が実に多様である。現在、スジシマドジョウの多くは環境省のレッドリスト・絶滅危惧種に指定されているほか、岡山県RDBによっても準絶滅危惧種として指定されている。</p> <p>なお、「どじょうすくい」は島根県安来市の民謡「安来節（やすぎぶし）」の踊りである。</p>			
			
		* シマドジョウ	

<h1>カワニナ</h1>		学名	<i>Semisulcospira libertina</i>
		分類	吸腔目 カワニナ科
分布	日本・朝鮮半島・中国・台湾まで、東アジアの亜熱帯域・温帯域		
生息域	川・用水路・湖沼などの淡水底		
<p>東アジアの淡水域に棲む細長い巻貝。主に落ち葉、付着珪藻、デトリタスなどの有機物を餌としている。ホタル類幼虫の餌としての利用が有名である。</p> <p>ゲンジボタルの繁殖促進の試みは日本各地で行われており、特に都市近郊の公園などではそういった活動が盛んである。その一環で餌となるカワニナを増やす試みが行われる。本種は清流にすむと思われがちであるが、実際はある程度の有機物のある川に多産する。そのため、山間部では本種を増やすために野菜くずなどを川に投入し、成功を収めた例もある。</p>			
			

<h1>コウホネ</h1>		学名	<i>Nuphar japonicum</i>
		分類	スイレン科 コウホネ属
分布	日本、朝鮮半島		
生育地	浅い池、流れの緩い小川など		
開花時期	6月から9月ごろ		
<p>根茎が骨のように見え、コウホネ（河骨、川骨）の名の由来となっている。葉は水中葉と水上葉がある。水中葉は薄くてやや透明で、ひらひらしており、水上葉はやや厚くて深緑、表面につやがある。花期は6月から9月ごろで、長い花茎の先端に1つだけ黄色い花を咲かせる。</p> <p>根茎を縦割りにしたものは川骨（センコツ）と言い、日本薬局方に収録された生薬である。調栄湯（ちょうえいとう）、治打撲一方（ちだぼくいっぽう）という解熱、鎮痛を目的とした漢方方剤に配合される。</p>			
			

<h1>カキツバタ</h1>		学名	<i>Iris laevigata</i>
		分類	アヤメ科 アヤメ属
分布	北海道から九州、朝鮮半島や中国		
生育地	水辺や湿地		
開花時期	5～6月		
<p>環境省のレッドリスト（2007）では、準絶滅危惧（NT）に登録されている。</p> <p>カキツバタは湿地に群生し、5月から6月にかけて紫色の花を付ける。内花被片が細く直立し、外花被片（前面に垂れ下がった花びら）の中央部に白ないし淡黄色の斑紋があることなどを特徴とする。ハナショウブに似ているが、葉の幅が広く、葉に中央脈がないことなどで見分ける。</p> <p>俳句の季語は夏である。</p>			
			

<h1>ミナミヌマエビ</h1>		学名	<i>Neocaridina denticulata denticulata</i>
		分類	ヌマエビ科 カワリヌマエビ属
分布	琵琶湖・淀川水系から九州まで		
生息域	流れのゆるい川や池の、水草が多い所		
<p>産卵も淡水中で行い、一生を淡水域で過ごす陸封型のヌマエビである。雑食性で、生物の死骸や藻類、デトリタスなど何でも食べるが、ヤマトヌマエビのように生きた小動物を襲うことはない。歩脚の鉤で餌を小さくちぎり、忙しく口に運ぶ動作を繰り返す。小さな塊状の餌は顎脚と歩脚で抱きこみ、大顎で齧って食べる。</p> <p>繁殖期は春から夏。ミナミヌマエビは卵の中で幼生期を過ごし、体長2mmほどの稚エビで孵化する。孵化直後の稚エビは尾扇が未発達で、体色は半透明の白色をしている。稚エビは海へ降りることなく淡水中で成長する。</p>			
			

<h1>スジエビ</h1>		学名	<i>Palaemon paucidens</i>
		分類	テナガエビ科 スジエビ属
分布	北海道から九州、種子島、屋久島		
生息域	川や池などの淡水域		
<p>昼間は石の下や水草、抽水植物の茂みの中にひそみ、夜になると動きだす。藻類や水草も食べるが、食性はほぼ肉食性で、水生昆虫や他の小型甲殻類、貝類、ミミズなど様々な小動物を捕食する。</p> <p>繁殖期は春から秋までで、初夏に盛んに産卵する。スジエビ類は発生に塩分を必要とせず、ミナミヌマエビと同じく閉鎖した淡水でも繁殖できる。</p> <p>日本では各地でモエビ（藻蝦）、カワエビ（川蝦）などと呼ばれ、淡水域では比較的馴染み深いエビとなっている。</p>			
			

<h1>タニシ sp.</h1>		学名	<i>Palaemon paucidens</i>
		分類	原始紐舌目 タニシ科
分布	ユーラシア大陸、アフリカ大陸、北米大陸、オーストラリア		
生息域	川、湖、池沼その他の淡水域に広く生息		
<p>数cmの黒っぽく見える殻を持つものが多い。特筆すべきはその摂食法の幅の広さで、物の表面に着生した藻類などを削り取って食べる刈り取り食者（グレイザー）であり、水底の沈殿物を食べるデトリタス食者でもあり、さらには水中の懸濁物を鰓で集めて食べる濾過摂食者でもある。このため一部の種は大きな状況変化がある中でも生き延びることができ、例えば水田のような環境が変化しやすい小規模な水域にも大型種が生息することが可能となっている。</p> <p>日本にはマルタニシ、オオタニシ、ナガタニシ、ヒメタニシの4種があり、日本全国の水田、用水路、池などに分布する。</p>			
			
		*ヒメタニシ	

<h1>セキショウ</h1>		学名	<i>Acorus gramineus</i>
		分類	ショウブ科 ショウブ属
分布	日本や中国、ベトナムなど		
生育地	山野の川岸など		
開花時期	5～7月		
<p>セキショウは、日本から東アジアに分布する草花。川の岸辺などの水辺や湿地の日陰に自生する。</p> <p>根茎は薬草として用いられ、神経痛や痛風の治療に使用されている。例えば蒸し風呂（湿式サウナ）で用いられる時には、セキショウの葉を床に敷いて高温で蒸す状態にして、鎮痛効果があるテルペンを成分とする芳香を放出させて、皮膚や呼吸器から体内に吸収するようにして利用する。</p>			

<h1>メダカ</h1>		学名	<i>Oryzias latipes</i>
		分類	ダツ目 メダカ科
分布	日本、台湾、朝鮮半島、中国など		
生息域	流れのゆるい小川や水路など		
<p>目が大きく、頭部の上端から飛び出していることが、名前の由来になっている。かつて日本では、小川にはごく普通にメダカの群れが見られた。しかし、1980年代あたりから、農薬の使用や生活排水などによる環境の悪化、護岸工事や水路の整備などにより姿を見ることが難しくなった。2003年5月に環境省が発表したレッドデータブックに絶滅危惧種として指定された。身近な生き物だったメダカが絶滅危惧種となったことはマスメディアにも大きく取り上げられ、日本各地で保護活動が活発に行われるようになった。</p> <p>観賞用改良品種を放流しないよう注意が必要である。</p>			